

2023年8月6日主イエス変容の日説教

出エジプト記 34章29—35節

ペトロの手紙二 1章13—21節

ルカによる福音書 9章28—36節

本日は祝日、主イエス変容の日です。8月6日の固定祝日ですが、主日になった場合はその主日と置き変わります。この祝日はABCに関係なく日課が共通で、福音書はルカによる福音書にあるイエス様の変容の物語となっています。このイエス様の変容の物語は、大斎前主日の福音書でもありますので、本日の聖書日課は、昨年C年の福音書と同じです。また旧約日課も共通しています。昨年の大斎前主日は、使徒書を中心に学びましたので、本日は福音書を中心に学びます。

「この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた」(ルカ9:28)と本日の物語は始まります。「この話」とは、ペトロがイエス様にあなたはメシアだと告白し、それに対してイエス様が第一回目の受難予告をした話です。受難予告というメシアという言葉とは似合わない出来事について告げた後、イエス様の姿が変わる物語が続くという物語の流れは、三つの福音書に共通していますが、変容の物語自体は三つとも微妙に異なります。

イエス様の姿は、マルコとマタイは脈絡もなく突然変わりますが、「祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、衣は白く光り輝いた」(ルカ9:29)とある通り、ルカだけが、イエス様が祈っている間に姿が変わったと説明します。「見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。」(ルカ9:30)という点はほぼ同じですが、マルコとマタイが、ただ「語り合っていた」として内容について明確にしていなのに対して、ルカでは「二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最後のことについて話していた」(ルカ9:31)と内容まで告げます。その内容は、受難予告を受けた「遂げようとしておられること」(直訳では「完成しようとしていること」)です。また、「エルサレムで」とその場所を明確にしていることもルカの特徴です。

周りにいた弟子たちの反応もルカは異なっています。マルコとマタイでは、突然ペトロが発言しますが、ルカでは「ペトロと仲間は、眠りこけていたが、目を覚ますと、イエスの栄光と、一緒に立っている二人の人が見えた。この二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った」(ルカ9:32-33)とあり、唐突さを和らげています。ただし、「『先生、私たちがここにいるのは、すばらしいことです。幕屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために。』ペトロは、自分でも何を言っているか、分からなかったのである」(ルカ9:33)というペテロの無理解を語っているところはほぼ同じです。そして、「ペトロがこう言

っていると、雲が現れ、彼らを覆った。彼らが雲に包まれたので、弟子たちは恐れた」(ルカ 9:34) と細部は少し異なりますが、不思議な出来事を目の前にして、弟子たちが「恐れた」という点は共通しています。ただし、福音書全体を通した物語の流れの中で比較しますとルカはマルコでは、この物語の位置づけが大きく異なります。マルコではこのお話を転換点として、弟子たちのイエス様に対する無理解が深まるのですが、ルカはそれほど強調されないのです。このあと、弟子の中で一番偉いもの(ルカ 9:46-48)、逆らわない者は味方(ルカ 9:49-50)、弟子の覚悟(ルカ 9:57-62)についての物語が続き、弟子たちと他の72人が派遣されます(ルカ 10:1-12)。ルカでは、弟子とは何であるかという認識が深まる転換点となっているのです。

それを反映するかのように「すると、雲の中から、『これは私の子、私の選んだ者。これに聞け』と言う声がした。」(ルカ 9:35) という部分の物語における機能も変わります。マルコでこの声は、ただ物語の中で響き、またマタイでこの声は、弟子たちの恐れを引き出すのですが、ルカでは、「この声がしたとき、イエスだけがそこにおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時、誰にも話さなかった」(ルカ 9:36) とただ無理解で恐れおののいたのではなく、十字架という決定的な出来事まで、最終的判断を引き延ばしたかのように描かれているのです。

物語の細部や、福音書全体における位置づけは、それぞれ三つの福音書で異なります。しかし、この山上の変貌物語が、本日の旧約日課、出エジプト記34章にある物語と関係していることは確かでしょう。そして、その物語で、主なる神様の栄光がモーセを通して現れたことと同じく、ここでもイエス様を通して、それが現れたとしている点も同じだと思います。ことにルカは「栄光」という言葉を用いてそれを明確にしています(マルコとマタイには「栄光」という言葉はありません)。

本日の物語は、白さ、輝かしさの中で、イエス様の栄光、主なる神様の栄光が示されたように描かれています。しかし、栄光の本質とは、神が神であることを示すことです。人間に求められる対応はその神を信じることだけです。ただし、イエス様を通して栄光が示されたとは、ただ何となく信じるのではなく、そのイエス様を通して、つまりその生きざまを通して信じるのが大切だということです。十字架にかかり、そこから世界にとって最も大切な愛を示されたイエス様を通して、信じるのが大切なのです。

本日は8月6日です。わたしたちにとっては8月9日と同じく、大切な日です。人々を愛で包む光ではなく、一瞬にしてこの世界に地獄をもたらす光を経験した日です。現代になっても世界は、その二回の誤った光から学んでいません。今でもその光を放つ兵器の有効性を保っています。だからこそ、私たちは、8月6日にこそ、イエス様を通して示された愛の大切さを確認したいと思います。礼拝を通した「**あの方の威光の目撃者**」(2ペト 1:16) として、人を傷つける光ではなく、人を愛で包み癒す光を大切にしていきたいと思います。